Monitoring Post
モニタリングポスト

第４回日本保健物理学会・日本放射線安全管理学会合同大会印象記

荒川　弘之
Arakawa Hiroyuki

1. はじめに

第４回日本保健物理学会・日本放射線安全管理学会合同大会が 2022 年 11 月 24～26 日までの 3 日間，博多駅から電車やバスで 1 時間程度の九州大学伊都キャンパス椎木講堂（**写真 1**）でオンライン参加を合わせたハイブリッド形式で開催された。日本放射線安全管理学会大会長は中島裕美子先生（九州大学アイソトープ統合安全管理センター），日本保健物理学会大会長は藤淵俊王先生（九州大学大学院医学研究院保健学部門）が務められた。

筆者は日本保健物理学会・日本放射線安全管理学会共に今回が初めての参加となった。また，今回の合同大会では機器展示コーナー等で一部現地実行委員を務めさせていただいた。これらの立場から印象を報告させていただく。

写真 1　九州大学伊都キャンパス椎木講堂外観
九州大学の百周年（2011 年）を記念して建造され（2014 年完成）入学式や卒業式等で用いられている。学会は，椎木講堂内の講義室や大会議室で行われた

2. 発表について

本大会では，特別講演 3 題，招待講演 3 題，JHPS-JRSM学会連携セッション, JHPS 企画セッション 7 題, JRSM 企画セッション 2 題という多くの企画に加え，口頭発表（**写真 2**）では以下の 12 のトピックについて，3 つの会場に分かれて発表された。

①放射線計測（18 演題）
②法規制･標準化, 福島第一原発事故, その他（5 演題）
③線量評価（8 演題）
④防災・緊急時対応（5 演題）
⑤ラドン・トロン（11 演題）
⑥現場の保健物理 / 管理・保全（7 演題）
⑦リスクコミュニケーション , 防護理論（4 演題）
⑧廃棄物（5 演題）
⑨放射線影響（11 演題）
⑩環境放射線（能）（9 演題）
⑪放射線教育（9 演題）
⑫医療放射線（9 演題）
以上，計 101 演題。

写真 2　口頭発表の様子

これらを見ていただければ分かるように，放射線防護に関わる計測・評価の基礎研究から，放射線管理や教育・行政に関わる実用的な研究まで，非常に広範囲なテーマで発表及び議論が行われていた。筆者はこれらの中では放射線計測が専門に近く，また，基礎研究が主であったため，自分の見識の狭さを反省すると共に，聴講により大変勉強になった。中でも，リスクコミュニケーションにおいて，自治体での環境放射能汚染への対応や市民との対話の発表が印象に残った。また，筆者の専門に近いところでは，ゲル線量計の応用や，放射化やX線撮影時の散乱線等への可視化についての研究が視覚的にも分かりやすく，今後の研究活動への刺激を得た。

ポスター発表は計48題あり，オンライン会場での電子ポスター掲載に加え，短時間の口頭発表（3分発表，2分質疑）も行った。短時間の口頭発表では，“ショートトークオンライン”という名前で3つの会場に分かれ，それぞれ16演題が次々に発表される形であった。前述のように研究内容は多岐にわたったため，一度に様々な分野の研究発表を聴講できて大変勉強になった。中でも長崎原爆による土壌試料のアーカイブ化の研究が（長い期間行われているものであるが）筆者にとっては目新しく興味深かった。一方で，発表･質問時間共に短かったので，理解が追いつく前に次の演題に進んでしまうこともあったため，別途質問の機会があれば良かったかと感じた。

3. 機器展示会場について

機器展示会場は，9社から出展いただき，様々な計測機器が展示された。また，大学や研究所の研究成果発表のPRの場としてのブースも設けた。会場は休憩場所を併設する形とし，ドリンクコーナーやお菓子を会場に置いて集客に努めた。講演会場から少し遠かったため，まとまった時間が取れた参加者に来ていただけたように感じた。今後は，講演会場にできるだけ近く機器展示会場を設けることが検討されても良いかと思う。

4. ハイブリッド開催について

今回は両学会で初のハイブリッド形式であった。ハイブリッド開催は現地開催とオンライン開催のいいとこ取りとなると見込まれるが，準備や運営で調整が多く必要になり，運営に関わる先生方はかなりの負担を伴われたように見えた（**写真3**）。細かい点としては，例えば，筆者も務めた座長は，質問時間において会場からの反応を見ながら，オンラインからの質問にも気を配る必要があった。

写真3　口頭発表とオンライン配信機器の様子
右下に配信用PCが並んでいる

一方で，先が見通せず，しばらくオンライン開催となっていた中，今回現地開催を決断されたことは非常に良かったと思う。現地での参加は，想定に反し参加者344名（うち学生は55名）中300名近くと大部分が現地参加となった。しばらくオンラインのみの交流で，数年ぶりに直接会ったという参加者の方々が多く見られた。筆者も久しぶりに会えた方が何名もいた。加えて，オンライン開催のみだと先入観から自分の興味のある発表しか聴講しなかったりするが，現地開催だと自身の研究と直接関係のなさそうな発表でも時間の関係で聴講したりする。この際に，意外な視点が得られて，今後の研究への刺激が得られることがあるため，現地開催の意義は大きいと感じた。

5. おわりに

今回の学会に参加して研究発表・聴講，実行委員等様々な面で関わり，多くの経験をさせていただいた。また，久しぶりの現地開催にもなり，多くの方が現地開催を望まれていたことを実感した。今後も是非現地開催を続けて欲しいと思う。

（九州大学大学院 医学研究院 保健学部門 医用量子線科学分野）